



大正大学法然上人御忌会の開催

仏教学部 特任専任講師 石川 琢 道

大正大学は天台宗・真言宗豊山派・智山派、浄土宗の四宗派で設立された大学です。このうち浄土宗の宗祖は法然上人といえます。

どの宗派でも、それぞれの宗祖様を大切にすることに変わりはありません。しかし浄土教系の諸宗派では特に宗祖様を大切にするのが特徴です。それは例えば、浄土宗の総本山知恩院、浄土真宗の本山である東西本願寺にまいりますと、本尊である阿彌陀仏を祀る本堂よりも、それぞれの宗祖様を祀る御影堂（浄土宗では「みえいどう」、浄土真宗では「ごえいどう」）の方が大きいことも象徴的といえるでしょう。

さて、去る1月20日に大正大学にて法然上人御忌会（ぎよきえ）が

開催されました。御忌会とは、法然上人の年回法要をいいます。亡くなられたのが建暦2（1212）年1月25日ですので、今年は805回忌にあたります。

昨年までは、本学の浄土宗関係の教職員を中心に、法要の企画運営をしてきました。しかし今年は、初めての試みとして学生主体で開催されました。

これまで、僧侶が行う勉強とは教学（教え）、布教（法話）や法式（お経の称え方等）が中心でした。しかし昨今、宗教の社会貢献が叫ばれるようになるなかで、僧侶に求められている活動にも大きな変化が生まれつつあります。

そのようななかで、私が担当する浄

BSR 通信

BSR 推進室ニュースレター第 23 号

平成 28 年 2 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室

〒170-8470 東京都豊島区西巢鴨 3-20-1

03-5394-3079（直通）

bsr_lab@mail.tais.ac.jp

目次

- 1 頁：巻頭言
- 2 頁：研究ノート①
- 3 頁：研究ノート②
- 4 頁：BSR 図書室／今後の予定

土宗僧侶をめざす学生を対象とした授業（仏教学基礎ゼミナールⅢ・Ⅳ）でも、僧侶の社会におけるさまざまな活動について学ぶようになりました。その授業の一貫として、学生主体で企画運営されたのが今回の御忌会です。

どうしたら、ご来場の皆さまが御忌会に親しんでいただけるのか？どうしたら、心地よく過ごしていただけるのか？学生たちがゼロから企画を行いました。結果、厳かなながらもわかりやすい内容の法要、そしてお茶の接待の運営など、さまざまな企画が持ち上がり、実際に運営され、多くの方にお参りをいただくことができました。

来年も同様に開催の予定です。お参りいただけたら幸いです。

研究ノート①

現代社会と寺院の接点

～僧侶派遣事業からみる寺院の危機

前号では、「アマゾンジャパン」でサービスが開始された「お坊さん便」について紹介しました。今号では、ある僧侶紹介業者の事例から、現代の“お布施”が抱える諸問題を考えてみたいと思います。

僧侶派遣の手数料の実態

コンパクトに葬儀をパッケージ化し、追加料金が一切かからない定価設定でインターネットを中心に業績を伸ばしている A 社。この会社も僧侶を手配するサービスをおこなっています。

Amazon での「お坊さん便」は、法要への派遣のみ扱っていますが（価格 3 万 5 千円、派遣のチケットを販売）、A 社の手配サービスは枕経から葬儀、法要まで細かく“お布施”の価格が設定されています。（※「お坊さん便」の独自サイトでは葬儀等も扱っています。）

今回、A 社の寺院向け価格表を見ることができる機会がありました。そこには、一日葬や火葬場でのみの読経、戒名を付ける場合、その戒名のランク別など、細かく価格が記されていて、さらにそれぞれの価格の寺院と業者の取り分が明記されています。たとえば、院号・居士号の戒名で家族葬であれば、布施価格 34 万円（寺院 20 万・業者 14 万）、四十九日や納骨などの法要は 4 万 5 千円（業者への手数料 2 万 5 千円）など。

この内訳の比率が妥当かどうかの判断は、人によりさまざまでしょう。僧侶派遣サービスのシステムは、派遣業者に僧侶（もしくは寺院）が登録をする、業者が葬儀・法要の発注を受け、日

時で都合のつく登録僧侶を派遣する、という流れが一般的と思われます。業者が元請け、僧侶は下請けとなるわけですから、配分は妥当かもしれません。僧侶は導師として汗をかいているのに、業者は労せず 4 割近い仲介料を取ること、違和感を覚える人もいるかもしれませんが、業者は受注するためのシステム構築、事務所経費、電話オペレーターやシステム管理者の人件費などを継続的に支出しなければなりません。逆にいえば、僧侶は労せず、つまり檀信徒付き合いや不特定他者への布教活動をせずに、登録しているだけで数万円から十数万円の布施収入を得ることができるわけで、その点から内訳比は妥当とも考えられるでしょう。

A 社ではありませんが、手数料 50% という僧侶紹介業者もありますし、たとえば、四十九日以降の法要を、業者を介さずに寺院が受けることを厳禁としている業者もあると聞きます。多く仕事を回してほしいがために寺院側から仲介料のアップを提案することがあると聞きます。なにが良心的なのか、業者と僧侶のどちらが抜け目ないのか、一概には判断できない問題です。

登録寺院の窮状

こうした僧侶派遣業というのは今にはじまったものではありません。また、派遣業者ではなく、葬儀社が個別に付き合いのある寺院に葬儀を依頼し、紹介料を得るということは古くからあったと思われれます。金額の明示や契約書による明文化がなされていなかったものが、社会の変化にともない、一般消費者の目に見えるようになってきただけともいえ、「宗教の商品化」・「お布施の対価化」についての全日本仏教会の反対声明は、イオンや Amazon という社会的認知度の高い企業・媒体が着手したこと

に慌てて対応した、後手後手の策と考えられなくもありません。

ある葬儀関係者から、考えさせられる話を耳にしました。それは、東京からはるか離れた過疎地域にある寺院の住職が、派遣業者に依頼して、首都圏での葬儀を回してもらっている。それも、1 件の葬儀では移動費用で利益が消えてしまうので、3 件くらいをまとめて（例：葬儀・通夜のダブルヘッダーを連日）、入れてもらうというものです。

その動機は、単にお金欲しいというものではなく、そうでもしなければ、お寺が立ち行かないという過疎寺院の実状があります。しかも、その事例の住職は、寺じまい（寺院を閉鎖する）にかかる費用ねん出のために無理をしているというのです。

ほかに、先述の 50% の手数料をとる業者に登録している寺院の一つは、新たに開かれた寺院で、檀信徒数も少なく、寺院経営の安定のために、紹介業者に強気で出られても、受けざるをえない。その業者は葬儀のみの紹介で、回忌法要では直接関わられるので、長期的に見れば檀信徒開拓になるとのことでした。

全日本仏教会の声明には、仏教界が社会のニーズに耳を傾けてこなかったことが一因として反省が述べられていますが、寺院の困窮というものも背景にあるのではないのでしょうか。派遣業者や登録する僧侶は叩かれやすいものですが、全国の寺院の過半数は兼業をしなければ成り立たないと言われる今、寺院を存続させるために、派遣業者に依存せざるをえない僧侶がいることも忘れてはなりません。社会のニーズがあると同時に、登録する僧侶がいる限り、業者は全日仏の声明に耳を傾ける必要を感じないのかもしれませんが。(o)

研究ノート②

食から考える地域とお寺

ひとさじの会公開講座から

ひとさじの会

1月23日、大正大学711教室を会場に社会慈業委員会ひとさじの会主催公開講座「食から考える貧困問題－地域とお寺の協働－」（協力：大正大学 BSR 推進室／公益財団法人浄土宗ともいき財団、後援：公益財団法人全日本仏教会／全日本仏教青年会）が開催されました。

ひとさじの会は2009年に浄土宗の若手僧侶が中心となって発足した任意団体で、生活困窮者支援を行っています。毎月第1・第3月曜日に、手作りおにぎりや医薬品を山谷・浅草周辺の約200人の路上生活者に配付してまわりながら、必要な支援の聞き取りやNPOや医療団体につなげるアウトリーチ活動をメインとし、その他、路上生活者の葬送支援や後述するフードバンクへの食糧提供も活動の柱となっています。発足当初は浄土宗僧侶が中心でしたが、今では、学生や一般市民、浄土宗以外の僧侶が多数参加するようになりました。

フードバンクとは

フードバンクと聞いて、耳慣れない方



も、いっしょにやることでしょ。フードバンクとは、まだ食べられる食料を集め、食料を必要としている施設・人に届ける社会福祉活動をいいます。食料品製造業者や輸入業者からは、なんらかの理由で破棄される、しかし、まだ食べることができる食品がたくさんあります。製造



や流通の段階で箱が壊れてしまって、中身には問題はなくても、店頭にならべられないものや、成型がうまくいかなかった加工食品など。それらの食品を企業はフードバンクに寄付をします。

そして、フードバンクは、寄付された食品を、児童養護施設や母子家庭支援団体、路上生活者支援団体など、食を必要としている施設・団体、または直接家庭に届けるという流れです。

今まで廃棄処分に費用がかかっていた企業にとっては、コスト削減にもなりますし、社会貢献にもなります。そもそも、食料品を捨てるという、心の痛むことをしなくてもすみます。一方、支援団体や施設の多くは、資金的に余裕のない状況での活動となっており、支出に占める食費の割合も低くありません。食料品を無償で手に入れば、大変助かるわけです。つまり提供する側も受ける側も大いにメリットがあるのが、フードバンク活動です。

近江米一升運動

ひとさじの会には、多くの方から、活動支援としてお米が寄せられます。そのなかで、当座の炊き出し活動に使用しな

い分については、フードバンクに寄付をしています。ただし、ひとさじの会とフードバンクの関わりはそれだけではありません。

今回の公開講座のパネリストとして、
・曾田俊弘（浄土宗浄福寺住職、近江米一升運動発起人）

・太田茂雄（フードバンク滋賀代表）という2名が登壇しました。（その他には、栗林知絵子（NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク理事長）、齋島一匡（NPO 法人田楽事務局）の2名）

滋賀県では、お寺へのお布施の一種として、今もお米（仏供米）が供えられる習慣があります。そうした地域性に着目した吉水岳彦氏（ひとさじの会発起人）が知人であった曾田氏に、仏供米のフードバンクへの提供を提案。曾田氏は、地域の浄土宗青年会を基盤として、近江米一升運動をはじめました。その受け皿となっているのがフードバンク滋賀で、曾田氏・太田氏からは、両組織の連携について報告がなされました。

ひとさじの会が着火剤となったのは、滋賀県だけではなく。仏供米の習慣が残る、大分や佐賀でも浄土宗青年会が米一升運動をはじめています。お布施としてあがったお米を、食に困っている人たちのもとに届ける。布施行の社会的循環ともいえる米一升運動は、仏教者の社会的責任の一つの好事例としてみることができるのではないのでしょうか。（〇）



BSR 図書室

『終活読本 ソナエ』

(産経新聞出版、年 4 回発行、907 円(税込))

「いつか迎える「その時」にそなえ、人生を自分らしく仕上げる」これをテーマに平成 25 年 7 月に創刊された季刊の終活情報誌で、現在 11 号まで発行されています。

主に葬儀やお墓について各号で特集を組み、様々な事例を紹介しています。葬送に関すること、例えば棺、祭壇、遺影、死装束、会葬礼状等々は、自分らしく、こだわりを持つとうと思えば、とことんこだわられるポイントとなります。個性的な葬儀のみならず、今後 20 年間に最期を迎える方が増え続ける日本社会において、単身や核家族世帯の増加など、「イエ」の変化で、様変わりしつつある葬儀や墓を考えます。

また相続や介護の問題、さらには高齢者を意識した健康や税制・社会保障についての記事も見られます。



加えて小谷みどり氏、江川紹子氏らの連載コラム、「らしさのある葬儀」という著名人の葬儀ルポ、終活に関する書籍紹介、著名人の死亡記事コーナーなど、終活に関する情報満載です。読者からの便りを紹介するページでは、一般の方の率直な意見を知ることができます。またインターネットの読者レビュー（評価）でも、今までの終活情報誌は葬儀業者・寺院からの目線が強かったが、当誌はユーザーの立場で書かれているという意見がありました。編集後記にあった、「寺院と遺族の思いの違い（ギャップ）があり、これを埋めないとますます寺離れが進む」という編集者の言葉が印象的でした。終活ブームと言われ、葬儀や仏事に関する情報があふれている中、寺院・僧侶が情報を整理して対応するのに役立つ雑誌です。

(M)

今後の予定

2月20日(土)	11時～12時	花会式(浄土宗)	鴨台観音堂前
	9時～13時	あさ市	南門 けやき広場
		埼玉県吉見町産のいちごを直売します	
3月19日(土)	13時～15時	お坊さんカフェ「僧話花」	5号館 1階
	11時～12時	花会式 春休み特別企画	3号館
	9時～13時	あさ市	南門 けやき広場
	13時～15時	お坊さんカフェ「僧話花」	5号館 1階



巻頭言執筆者 紹介

石川 琢道 (いしかわ たくどう)
 大正大学 仏教学部 特任専任講師
 駒澤大学 仏教学部 卒業
 大正大学大学院 仏教学研究科博士課程 単位取得満期退学
 専門は、中国浄土教思想史 特に曇鸞思想の研究。
 平成 21 年 3 月 博士(仏教学) 学位取得
 浄土宗 所属

巻頭写真

大正大学法然上人御忌会の様子